

風聽臚言

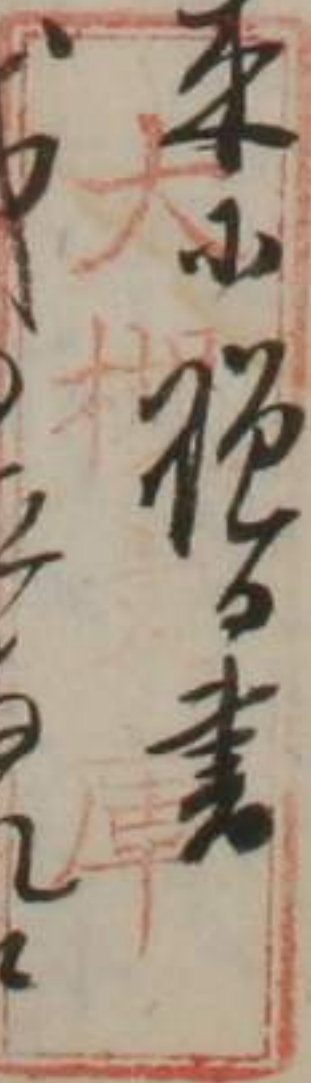
床申 辛酉

洋学文庫  
文庫8  
A 123





主人井伊家之家本山初書



交淺くく之海軍の至人へ此の所を以  
 又事柄よきを弁せしに暇何れも僕の  
 粵之兄に好むる言に傾蓋の親に此を以て  
 松尾の言も亦氣象寛容にして懐懐  
 一端を念ふ所あり今日の武帳に世に  
 寸表を具陳するは之を以て此の如く  
 西の捨つるに相合し今日言ふ事家の  
 存心の上と流云終つて中へ其後  
 交易ありしに以て結繋指に此世に





才の多しを極すを存するたに何れもあつたは  
 是の跋扈の極を以て未朝敵の形迹  
 無の處に此の極を張るもとの所を以て  
 人の極を以て極すは切に徳の業中にも及ぶ所也  
 至第に今の中より及又別に能向槍の條を被け  
 當時理勢を安んずるに以上使を難言  
 此の意を以てたはるは一箇中初念極用難言  
 此の法は由由 上意に首を私意を怨むる極  
 何れも似たり是の也 兵糧の買ひとる多し人極  
 此の中より以て此の極を以て後仇の仕業といふ事  
 此の事

野統として金華を以て中より中より此の事

將軍家の以て律律と云ふ事多しは我は是の也 兵出  
 不可無名朝敵征伐を以て切に中より中より私意を  
 指して唱ふは天下の法度と云ふ事多しは我は是の也  
 為事に似たり是の也 人若為主従義の事君の  
 仇を報ふるを以て天下の法度を極す事  
 何れも云ふは我は是の也 中より中より我は是の也  
 此の事多しは我は是の也 金華を以て何れも  
 中より中より中より中より中より中より中より中より  
 中より中より中より中より中より中より中より中より



無足来り物と云ふ事をして好む一付の目も  
義と云ふ名に似て心は澄みと云ふ事も存す全匹夫の  
勇として云ふ人の壯士大死の只何んぞ智者の如  
き所を犯し又事端を返用して由來之水戸家  
法と云ふ事あり一存一亡何れも継計と云ふ左  
に継問に於て物考終るといふ事ありと云ふ事あり  
又お互に徳者一様著し予峰起終成と云ふ事あり  
心也譽と云ふ事あり予と云ふ事あり 將軍家  
以我光と云ふ事あり予と云ふ事あり 將軍家  
終れ予と云ふ事あり予と云ふ事あり 將軍家

元見可畏

泡と消来り予と云ふ事あり予と云ふ事あり 今一國  
思以予と云ふ事あり予と云ふ事あり 今一國  
予と云ふ事あり予と云ふ事あり 今一國  
大石良雄等者家の事をすし予と云ふ事あり 今一國  
體と云ふ事あり予と云ふ事あり 今一國  
輕重と云ふ事あり予と云ふ事あり 今一國  
内匠以予と云ふ事あり予と云ふ事あり 今一國  
耻辱と云ふ事あり予と云ふ事あり 今一國  
予と云ふ事あり予と云ふ事あり 今一國  
程の大事と云ふ事あり予と云ふ事あり 今一國

胸中成美  
任此一語  
教復





しく血けん又昔今の形勢を以ては徳に對し  
 接兵を乞ふ一復仇を勸中は族も是を以て利害  
 と從て當りて復仇を勸中は族も是を以て利害  
 の善方。是を以て凡人の乃及も是を以て宛善を  
 了す一僕等輩の如き非ざる。徳に在るは  
 又愚者一得る事あり是を以て具陳せざるの  
 理勢を以て是を勸中は族も是を以て利害  
 方と同一なり是を以て徳一分の死に阿はざる  
 徳川家と為るといふは中は族も是を以て利害  
 の善方。是を以て凡人の乃及も是を以て宛善を  
 了す一僕等輩の如き非ざる。徳に在るは  
 又愚者一得る事あり是を以て具陳せざるの  
 理勢を以て是を勸中は族も是を以て利害  
 方と同一なり是を以て徳一分の死に阿はざる  
 徳川家と為るといふは中は族も是を以て利害  
 の善方。是を以て凡人の乃及も是を以て宛善を  
 了す一僕等輩の如き非ざる。徳に在るは  
 又愚者一得る事あり是を以て具陳せざるの  
 理勢を以て是を勸中は族も是を以て利害  
 方と同一なり是を以て徳一分の死に阿はざる  
 徳川家と為るといふは中は族も是を以て利害

徳あるは善なる處

三月十日

阿波藩

沼田實三郎

庚申四月廿日終了

飛鳥のちやう

一井伊侯と討めよあはれ浪人者懐中ニ水戸老公  
の自若きものあり今度こそ首を切らして金槍を白き  
ト云ふ由風説仕いふは是ハ水戸老公城に居て  
若作りのことと津くし信用不承承事と云ふは是  
以老公の終るまで水戸老公の安危掛りては三子  
事計り理にそなひ皆懐中の十七人若れ討死に定候  
ハ勿論とて戸骸の中は老公の首を切らるるに主定  
に滅亡  
至るまで百も承継つるし物に交信據に  
懐中侯事ハ正定事と云ふは且又十七人の内代

河岸より自殺者二人御坂の深子も果若一人  
 及び井伊の討めり者戸後の中この二  
 第一不審の産の老公の身之大切に存肌身  
 不難位に之は強懐中可致すは是は又老公の書付  
 加添に賜り後日之程懐中可致すは是は又老公の書付  
 是れ一祈の場は傷死人後子撫使成の中情忠を  
 二川之を懐中可致すは是は又老公の書付  
 産不地玉極は是れ一祈の場は傷死人後子撫使成の中情忠を  
 我々存心

一十七人者王乱妨の心中内八人最上等目許仕回意  
 者姓名中法法お侍の程は若くは水戸表  
 能き同志者或は上公の御代は冷味は是れ一祈の場は傷死人後子撫使成の中情忠を  
 中存心  
 以冷味は是れ一祈の場は傷死人後子撫使成の中情忠を  
 中存心  
 自許仕回意  
 是れ一祈の場は傷死人後子撫使成の中情忠を  
 中存心  
 自許仕回意  
 是れ一祈の場は傷死人後子撫使成の中情忠を  
 中存心

若れこれに因かて事昭白にありし如き事  
 不及知る事案上切彼ら言し陪臣に切腹に檢使に  
 之れ有る定法に交りて事同然、此徳田村等檢使に  
 不備に中りて主人に忠義探取し、之れを以て定法  
 に對し、約付らるる事存し、言し謝あり、予は陶侃様  
 して謝公に法ぬき事を行き、しは律にて法に拘泥致  
 し、凡俗に役人の事定法ぬき、心持を以て人を刑  
 情案を察し、處置を付らば、仁義を要するもの  
 中、決て一件も法ぬきは持たず、以て此處置を以て  
 水戸の一家の事、是れ天下に素業を損、終に武運を損

候、お成りすかたき候

一 去る二月廿二日水戸城へ出奔し、在出は高橋多下  
 井邊氏の等ぬれ人二三あり、かりし中、當中細  
 二 在首より、此國御厚く思ひ、是れ忠懐に共せ、可  
 三 しい旨、台榭に刑法に、より、情事者世に、  
 外弟の氣を、是れ中、其の中、太夫、其れ、  
 非常、其れ、此國、此君、勇気、在、其れ、  
 一 橋本、此、養君、其れ、此、此、  
 二 中、此、此、此、此、此、此、











不憚其刃傷之及中其怨之甚矣時之患之也九  
 此至之也之也然之也而水下者公以府因一事  
 半中其解之也之也之也長也之也之也之也  
 半中其解之也之也之也一向以播之也之也  
 其有心者存也大學之其也哀於而辟焉之  
 其所也而辟焉之也之也水聲也之也之也  
 賦也之也之也之也之也之也之也之也  
 以弟之治亂之也之也之也之也之也之也  
 無勝之也沙法之也之也之所作也之也之也  
 也之也之也之也之也之也之也之也之也

也之也之也之也之也之也之也之也  
 也之也之也之也之也之也之也之也

西五月三日用者久世大和書作子也對好及  
こゝに居る可也

私領分對好海海浦、碓泊、魯西五和修造子也  
急退帆、惣、冬、著、及、中、海、留、海、中、少、海、深、意、  
開港、存念、水、色、之、群、交、進、不、法、舉、動、只、  
為、事、以、仰、出、中、方、  
兵、端、と、不、用、  
前、無、  
お、割、り、交、多、人、教、  
安、事、中、者、  
あ、事、中、者、

己海

胸板を打貫及即死に傳却船に強ぬは是と

公儀の通商の事柄有恥辱を思兵端を不用極と

折角に制強を下不敵有右の通渠の中を破り率

に奮激不二形是の討死を中ては小内は熱氣解除に

筋更の事第一武道元恥辱に限る存存に依る事

も事に入らざる全一已に事なき

中節に沖那礎共成中多敵兵食不足に方代

四方大洋に必柄援助の類なきに始終に傳笑無

是東も存上り眼有是長絶去其賊に傳絶聞

以事長存不願没患討死中物中一回決心仕絶去

心も右重大に事柄存無理に折に押至る一

種も種に何れも何れも是連に人心一定に

法指揮傳も仰に衣前歸るに道渠の好子

を及に機舎に事に事何何時及多我の絶量

存に事印に至時勢不ゆ事情一傳傳事と事

故傳る事事以上

日月十音

宗對馬也

六声吟社詩存

寧靜閣藏

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

父久元西多 廿日 廿日 廿日 廿日

止て少集内中領内藩泊るる而五和克十二  
大船越瀬るに女あり少者あり其者其に諸砲言  
お果に固に御士少人獨細に法に所業及短書  
順に相立十三階より少招輝り何の道に西に北に交  
十三方ふくまふ人共凡万人の瑞船較艘に乘船古船  
越瀬戸者所前々乗車回名に少に瀬戸下直以し  
小船も亦あり少者所り少船に乘船船泊り橋  
所程遠く固に人較り無きと見以て本橋揚陸

水月寺土寺切編

一頁 淨園藏





予心之好也存家未末之也  
幸望之也亦多矣在彼一可也

文和元年 五月廿九日 用者 祝

今日少神公台通所夜未祥  
多人報押入身家未先防  
三人討留去人老手府為負  
家未抽押也衣號堂是也  
及詮義也一閣夜之義何方  
亦知方社家未世也

陳紀方

第

上原

石川治助  
一番藤次  
山崎直助

存心

横地直三郎

深心

川邊初十郎

古く由りて善徳の園坊に在りて程の重  
力ありて法外の重なりたり

五月廿九日

松平時之助

此夜四半時以爲始東御寺に怪鳥あり  
多人驚押して有園の事多かりて速上河巻  
下張出りて捕獲せり怪鳥ありて人曰捕得  
おれと云浪人捕獲三節に下立者西十九年  
の由懐中ニ存心書と記し封じ置りて後  
御園守の支配調役並大塚九右衛門の御事  
合おし後中より先教如物に人教りて御事  
御園守に事細し事に出りて先此  
の御事なり



五月廿九

松平初永

酉、七月廿八日夜四ツ半時英人宿寺高橋

東御子、切上、稻籍者姓名

馬廻、有野半弥

田口、富次郎

吉本、新次郎

森、半次郎

和泉、家持、柳、誠太郎

木村、幸之助

石川、金四郎

矢野、重之助

海色、圓飛

古川、主之助

自、山崎、信之助

中村、貞之助

小堀、寅吉

馬場、忠平

七、松、平、人

御用、出、役、者、名、目、手、紙、奉、寄、者、名

河野、寅吉

神尾、道、助、之、助

中尾、登、次郎

北條、重、三郎

今井、善、十郎

天竺、定、次郎

廿九日、御書、御果

英人料理番

子負

英人

素門番

子負

英人

英人住方門番

即死

英人

小堀村、店、屋、名、目、御書、御果、御書、御果、御書、御果

池田、名、目、御書、御果、御書、御果、御書、御果

水戸縣志卷之四

寧靜閣

別當

印瓦

上人

外

一説虎居

狼藉若野人本富山一曰  
虎居虎居  
トカス茶屋と自叙ス

丙六日 水戸屋分

七月廿日 水戸表 立吉浪人北松八合

北松八合 水戸表 立吉浪人北松八合

北松八合 水戸表 立吉浪人北松八合

北松八合 水戸表 立吉浪人北松八合

北松八合 水戸表 立吉浪人北松八合

北松八合 水戸表 立吉浪人北松八合

北松八合 水戸表 立吉浪人北松八合

北松八合 水戸表 立吉浪人北松八合

北松八合 水戸表 立吉浪人北松八合

水戸縣志卷之四

寧靜閣

今く書集ししもの多き西ホトホホカ  
 本は年々事々其確と実ある事極  
 次第有る事極き、中約を履し、精  
 此は程又中々事々其確と実ある事極

百六月

英國新聞紙

西國紀元千八百六十年英佛二國ノ大清ヲ伐テハ實ニ  
 去年五月廿八日北河ニ於テ二國ノ兵大敗ヲ取ルノ報ナリ  
 英國ノ大將「トル」同ク船手大將「アップ」テマアラホ、支那  
 北邊「タイル」ト云所ニ許多ノ軍艦集泊ス佛國ハ南海ヲ  
 隔テ「チツ」云所ニ同ク集泊ス軍ノ兵卒凡四萬五千ト稱ス  
 兩所ヘノ蒸氣船ハ我五時ニシテ往復スト云フ去ル六月廿日  
 英軍ヨリ四五艘ノ「ゴ」  
 是蒸氣船ナリ、ゴハ鉄砲船ノ義ナリ  
 發シ「ペイ」ノ港口ヲ測量ス清軍ヨリ砲ヲ放ツ雨ノ如  
 毛皆中ラス船ハ返ルナリ同廿三日軍艦許多寄セ来ル

將船ハ三里沖ニ碇船ス餘船ハ皆港ニ来リ砲ヲ放ツト雖モ  
 更ニ應スル者ナシ忽砲臺ニ登リ見ルニ一人モナシ因テ皆ニ  
 此砲場ニ上陸ス此所水乏キニヨリ近邊ニ清水アラント五  
 十人許水ヲ尋ル所忽四五百ノ清卒来テ取圍ミ皆危  
 キ所元帥ヨリ援兵許多来リ死スル者僅ニ十四人清卒四  
 百餘ヲ打殺スト云此所ヨリ二里許隔テ一大要害アリ衛卒  
 四萬餘騎兵一萬五千。七月五日此處ニテ合戦スルヲ我ニ時半  
 清兵白旗ヲ出シ悉ク降人トナリ終ニ乘取リタリ英死スル者  
 百人。佛死スル者一百五十餘ニシテ清兵死スル者ハ萬ヲ以テ  
 數フト云フ其故ハ去年英國ニテ發明スル「アームストロング」

ト云フ銃砲遠町ノ利器ニテ畏ルヘキモノナリ此器我ニ里半内外  
 ニ達シテ更ニ虚發ナシト云フ夫ヨリ直チニ天津ニ推寄ルニ回  
 モ皆降ニ出ル是ニ因テ順天府帝王始メ羣臣悉ク滿洲  
 ニ走ル今英佛北京ノ政道ヲ布クト云フ流石ノ大境モ一舉  
 シテ亡滅ニ及ヒタリ尚復報ヲ待ノミ  
 客歲ヨリ支那海岸ノ各所守衛之ナシ強盜徘徊シ土民  
 困難シ盡キ各國ヨリ警言衛スト云フ  
 一玆說ニ前明ノ嫡孫ト稱シ七八年ノ前ヨリ廣東以西ヨリ  
 義兵ヲ起シ漸クニ蔓リ既ニ南京ヲ取り今居所ト定メ  
 自ラ皇帝ト稱ス兵卒許多アリト云フ内地

併吞スト上海ニ使ヲ指送り西洋諸國ト和親條約シ内地  
 住居随意タルヘキ由申シ遣スト雖一同ノ返答ニ南京有君ハ  
 是義兵ノ徒ト云フモ北京皇<sup>帝</sup>ニハ逆徒ナリ先國內ノ事ヲ  
 仕舞ヒ復如何様トモ致サント云フ南京大ニ怒リ上海ニ軍卒ヲ  
 指向ル英一千佛一千花旗一千ノ兵兼テ護衛スルヲ一戰  
 打退ルト云フ是明孫ハ一時ノ英傑ノ由過ル所ノ寺ニ皆  
 破却シ木石銅ノ偶像ヲ破碎スト云フ衣服容儀ハ前朝  
 ニ復古スルナリ

萬延紀元九月朔五日寫於鴻漸齋雨窓之下

日本使節華盛頓ニ着  
千八百六十年十月十六日  
 倫敦新報抄

合衆國ニ差遣セル日本使節ノ華盛頓ニ着セシ  
 ハ蓋シ華盛頓ノ都人士ヲシテ驚カシムルナ  
 ラズ周ク合衆國ノ諸人庶ヲシテ悉ク珍奇ノ想  
 ヲ起サシム○嚮ニ既ニ布行セシ説ノ補遺トシ  
 テ爰ニ猶數件ヲ附記ス須ラク第五百八十葉面  
 及ヒ第五百八十五葉面ノ圖ヲ照觀スヘシ紐育  
 ノ坊長ゼワシントンガ第五月十四日ノ記ニ使  
 節華盛頓ニ着セシ始末ヲ詳ラカニセリ今之ヲ  
 抄舉ス○黎明ニヒラデルニ一船使節及ヒ倍從

ヲ乗セ絶ヘズ蒸汽氣ヲ發<sup>ス</sup>ホトマク河ヲ駛ス  
凡日本畫工船曲折大凡毎ニ眼ヲ注テ景色ヲ取  
ル<sup>トモ</sup>トブルノニニテ蒸汽氣機ヲ閉時ニ鐘聲  
悲響ヲ報ス衆人歎息ノ色アリ○使節郷信ヲ得  
其本國ニ留レル父ノ消息ヲ知レリ○着船前  
當リ夥多人水軍場ニ蟄集ス裡ニ許多貴顯ノ  
婦人アリ○十一時半強ノ比ニ水軍場ヨリ一砲  
ヲ放リ汽蒸氣船ノ見エルヲ報ス其後一野人ア  
リ去リテ埠頭ニ至ル○蒸氣船近ツクニ及ビテ  
水軍隊士其船ノ上層ニ小星ノ旗章<sup>漢人所</sup>ヲ建

ル瑪<sup>ヨ</sup>珥<sup>ル</sup>ベルルト蒸汽船ニ至リ華盛頓都人士  
ノ命ヲ告テ其遠来ヲ祝ス使節リノ禮待ノ辱キ  
ヲ謝ス○爰ニ於テ第一ニ迎待ノ信儀ヲ小艇ヲ  
リ出シ贈リ終テ日本人許多水軍將校ノ東道ニ  
於テ米利堅及日本旗章ノ間ヨリ上岸エクカヒ  
夕レフカナニ其同伴水軍將校ト駈列トコシヲ  
待使節ヲ迎テ今衆國及ヒ本國統領<sup>即所謂</sup>ノ命  
ヲ傳ヘテ其来聘ヲ祝シ使節日本政府好祝ノ情  
通致ス支愛ナルペリリ之ヲ待接ス○此ペリリ  
他重大ノ儀事ニ當テハ常ニ恭謙ナリ今其國人

ト共ニ使節ヲ待接スルニ與レリ甚喜悦シテ坐  
セリ○有~~位~~ノ諸人譯司ニ由テ言ヲ通ジ其姓  
名ヲ知リテ拜揖ス○板路ノ側ニ兵士隊ヲ列ス  
使節此道ヲ行テ門ニ入茲ニ大統領府ノ儀衛ヲ  
列ス○第一ニ大統領ノ衛兵行キ次ニ日本人騎  
行シ次ニ小状鳥籠ニ似タル赤色麻六甲革ノ大  
方函ヲ荷ヒ行ク蓋シ條約ヲ入ル、モノトス○  
次ニ水軍隊並ニ他ノ隊行キ此間ニ各種ノ樂工  
行ク○ペンシレルエニ憩亭ニ浴テ群人雜踏シ○  
牆人面ナラサルナシ○水軍場ヨリ日本人ノ館

舎送館<sup>ル</sup>井ルザルヅニ至ルマデノ間誼囂極テ甚シ  
蓋シ日本人其館舎ニ達セシハ大抵鐘時一時四  
分時ノ三タリ○歩者荷者肩摩轂擊セコレハ將  
ニ日本ノ役人水軍場ヨリ其館舎井ルラルヅニ  
到ルニ殆ト一時ヲ費シタリ○民居ノ動化往時  
ニ倍ニ郊外ノ藪澤皆悉クコレヲ埋メテ陸土ト  
為セリ○客舎井ルラルヅノ内ニ婦女娘孃及ヒ  
此地閑院家ノ處女来リテ滿テリ是来聘ノ使節  
ヲ待饗スル為メナリ疲憊セル遠客應接ノ為メニ  
時ヲ費スル事一時ニシテ休息ニツク○群人散去

シ兵士其營ニ歸ル使節大統領ブカナニ謁見セシハ  
第五月十七日我閏月也午前少許ニ使節館舎ヲ發  
シ無蓋車ニ乗ル衛兵前後ヲ警シ水兵及ヒ砲卒左  
右ヲ衛ル○使節ノ衣服ハ刺繡甚美麗ヲ極ム○海  
陸兩軍ノ將校一列ヲ為シ白院ノ東房ニ陣シ此  
大禮ヲ衛護ス午時房中ニ開大統領内閣諸官即  
相ヲ從テ入テコレヲ臨ム○内閣秘史ケス歩テ前殿ニ至リ  
日本全權及ヒ其副補ヲ引テ來進ス使節等大統領  
ヲ見腰ヲ屈テ拜ス○上等ノ使節ソノ邦語ニテ使節命  
ヲ大統領ニ致ス○使節使命ヲ達シテ退キ速ニ復進テ

拜スル事始メノ如シ時ニ大統領譯官ニ依テ回答ヲ傳ヘ  
使節其日語ノ寫紙ヲ大統領文典シテ其命ヲ終ラ○大  
統領使節ト互ニ手ヲ執リシ後ニ使節内閣諸官并軍  
務惣督ツツ謁官ヘシトト其次序ニ從ヒテ互ニ揖禮ヲ為  
ス○爰ニ於テ其禮終リ使節其館舎ニ歸ル儀衛總テ來  
路ニ乘シ○本條約交附ノ義ハ第五月廿二日政府ニ於テ是  
ヲ行フ○其儀只條約書ヲ互ニ綿密ニ相比較シ相証告  
ス耳○第五月二十五日午食ニ大統領使節ヲ饗食ス之  
ニ預ル者貴客若干人 日本宰相ハ日本ト使節ノ交際  
アル諸國ヘノ使節ヲ送ラントセリ○其國ハ英吉利佛



郎機俄羅斯及ヒ尼達蘭是ナリ

華盛頓白院ノ東房ニ於テ大統領日本使節ヲ請ル

圖

内閣秘史ケス 總督ソト 大統領ブカナニ

甲比丹ドーホト 甲比丹ホルトニ 甲比丹ホルテル

使節並譯司 甲比丹レ一 條約ヲ捧持スル者

第五百八十一葉面圖解

日本使節華盛頓着之圖 條約ヲ入タ函

萬延元庚申年八月

津田真一郎譯

薩州布書

萬延元年八月廿日

今別ニ種多ク在中ニ在リ浪人共カ別紙ニ包テ書キ  
指サシテ又ニ之主人ニ生國ホクニ精ニ事リ之ニ此  
等様子細見ニ種多ク見テ中ニ善ク居ル者ハ一ニ書キ  
之趣ニ此條約ニ事多ク見テ國ニ對シ以テ好ク不  
能ク及ル可及接物ニ勿論ニ之ニ在ル者ハ之ニ及  
ル者ニ由テ子孫ニ出テ存於横濱也何如ニ及テ  
此種斗ニ在リ押方ニ付テ精ニ致シテ善ク居ル者  
ハ人報ニ由テ一押止ニ善ク居ル者ハ兵端ニ在リ  
出来仕多ク見テ入ル事ハ右接物ニ事ニ接置キ以テ

六月四日不言不承

宣青良非

其所以味小也... 公之威定  
其所以人教也... 子細...  
其所以能合也... 次第...  
其所以書也... 添... 何...  
用者... 何... 事

八月廿八日

其後... 時... 居... 泉...

川上 式部

川上 龍衛

謹以書付存之

方今神州之形勢... 累卵... 危...  
根元外事之勢... 恐怖... 橫濱村...  
之用... 港... 人心不居... 點夷...  
賊吏之賄... 愚民之欺... 耳目之...  
欲心... 日用... 漸... 術中...  
入... 氏... 飢渴... 患... 及... 術...  
時... 利... 比... 民... 吞... 子... 致...  
大害... 醜... 先見果... 之... 之...  
難... 是... 之... 以... 為... 恨

水月合土持字刀編

宣爭目

宸襟一啓有以 倫言此為其要路

女司能道有甚救塞也多也

河讓位之由是也予りり千載不磨之遺恨  
也其縮也然也是也彼之跋扈致也水戸前  
中納之株也其德也折柄也我之赤心也其何  
是存納也其是也予り風之傳承也其也其何  
大病之由也予り也當今天下之模範也其何  
英明也予り也 沖尾形株也其承知也其也其何  
予り也予り也予り也予り也予り也予り也予り也  
敵之出下也其民塗炭也其苦隔人也其救人也其

沖尾形株也其武德也其仰遂也推系也其也其也  
仰也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也  
也外弟也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也  
存也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也  
一筋也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也

萬延元年八月

自平山半六至中根左四三十七人



三月

二月廿五日

久世古くも後内海山は古くも

八月分

文武也教育留儀存るる事

存儀も教も存るる事

中世存るる事

中世存るる事

中世存るる事

儀存るる事

儀存るる事

儀存るる事

儀存るる事

儀存るる事

儀存るる事

儀存るる事

儀存るる事

儀存るる事

二月





棄假歸真論

假者何偶像菩薩也真者何獨一真神也何謂棄明知為  
無益而擯存棄絕之何謂歸明知其為真而崇敬歸從之  
俾天下萬國人生前同受太平之安身後共享天堂之福  
也乃世人不然不知棄假歸真反行棄真歸假誠可哀也  
四海皆兄弟吾甚不願兄弟乃爾也固不得不表明其理  
以為天下後世勸歷考前古未有偶像菩薩而三皇五帝  
之年壽大約皆以百計自後漢明帝時佛始入中國而偶  
像菩薩之風由此漸盛延及後世服事愈謹而年代愈促



所謂假者此耳曾見梁武有三度之虔不旋踵而見弑於  
叛逆唐王有拒諫之堅未幾亦就宇衰微何如古時之無  
偶像菩薩子後世之君亦有明知為無益而欲去之惜去  
之非道而行之不力也是以北魏盡誅沙門世宗毀滅佛  
像而頹風流傳至今尤熾也世所傾心服事者有所謂閔  
君北帝天后者概不吝銀錢用致犧牲以饗之原其心謂  
祭祀豐潔可用以飾我過也則其所開祭祀之門適為長  
惡之階且不知此三人者一屬虛誕一為閹女即漢壽亭  
侯亦不過為照烈皇帝五將之一也皆猶人耳其身已死

其魂受報其墓中枯骨且難保其不為狐狸之穴也夫不  
能自恤其生安能恤人之生不能自救其死又安能救人  
之死哉乃以生活之人拜死朽之鬼愚矣以有用之軀崇  
無知之木趾矣且盜神天錫人可食之物獻所不食之口  
亦賊矣譬秦中有一不肖子盜父母躬耕糧以飽越人之  
腹反禁父母之食為父母者安得不怒耶雖老邁懦弱亦  
必糾合親屬相助趕逐焉况萬物由神天發生乃因以詭  
嬖其所不當事之假神而其所當事之真神反視同秦越  
雖生前得脫斧鉞之刑而死後決難逃永火之禍也予日

悲之翊稽無始無終獨一上帝於摩西創世歷代傳盡可見其神能已創造天地人物皆非人所能而真神獨能闡室語默動靜皆非人所知而真神獨知所謂真者此耳無所不知無所不能先天地而在後天地而存巍巍帝德不可測度也至慈悲至可憐不忍罪人沈溺願遣愛子耶穌降世流他寶血贖人大罪其本末盡載於新遺詔書中惜中國先聖賢不知其人也若能尚知之吾知其必俯伏而尊從之然不知尊崇耶穌猶知敬畏神天也子曰畏天命經曰郊祀真神又曰以悅帝心果何所謂耶豈非神天

哉世人不思誤以天地為神天雖設祭祀之禮全無敬畏之愧亦何裨益哉假有人奉饌以食父母適父母不在而曰父母不在姑食父母所居之室可乎萬々無是理也凡不尊崇神天徒以虛禮煩天地者即此之謂歟所謂失其真而認其假亦甚謬矣至於祭祀祖先則尤謬矣况祖先既死拜之庸何裨哉或曰生我者父母父母我當事也不知我生於父父生於祖祖生於祖而溯其元祖將誰生者將謂牛乎抑牛僅生牛且不能生馬安能生人將謂馬乎抑馬僅生馬且不能生牛亦安能生人然則萬物各生其

類皆不能易類而互生則可知非神天安能有元祖通生  
我耶或曰父母鞠育我父母之恩昊天罔極也要知當盡  
其心於生前不必費其力於死後且知孝父母當知孝神  
天父母養我之糧皆神天所賦苟雨露不施萬物從何發  
生父母將何以活我且神天欲我死父母不能使我再生  
古今來見多少鍾愛嬰孫夭逝耶此可知神天之生我保  
我其恩之大小輕重非父母可同日而語也予日念之今  
余捨安樂之地而入殊俗之鄉離親戚之好而來異音之  
域茫茫重洋皆所親嘗而後始能至此願諸兄弟及早悔

罪棄其所當棄而歸其所該歸則由生而死由死而生萬  
福咸臻何樂如之苟聖道非真余何必受此艱費此財貽  
遠方人笑余之拙也誠惶誠恐渴望兄弟棄假歸真以獲  
後福幸甚幸甚

清英續約并暹羅條約

大槻庫

大槻庫藏書

前英欽使... 欽此

咸豐十年九月十五日內閣奉

上諭恭親王奕訢奏互換和約一摺本月十一十二

等日業經恭親王奕訢將八年所定和約及本

年續約與英法兩國互換所有和約內所定各

條均着逐款允准行諸久遠從此永息干戈共

敦和好彼此相安以信各無猜疑其和約內應

行各事宜即着通行各省督撫大吏一體按照

辦理欽此

續增條約



茲以兩國有所不恆

大清大皇帝與

大英大君主合意修好保其嗣後不至失和為此

大清大皇帝特派和碩恭親王奕訢

大英大君主特派內廷建議功賜佩帶頂冠星會

並金額爾額爾金公同會議各將本國恭奉

欽差全權大臣便宜行事之

上諭等件互相較閱均臻妥善現將商定續增條約

第一款

開列於左

一前於戊午年五月在天津所定原約本為兩

國敦睦之設後於己未年五月

大英欽差大臣進京換約行抵大沽砲臺該處守弁

阻塞前路以致有隙

大清大皇帝視此失好甚為惋惜

第二款

一再前於戊午年九月

大清欽差大臣桂良納將

大英欽差大臣額爾金

大英欽差駐華大臣嗣在何外居住一節在滬會商

大英所定之議茲時申明作為嚴論將來  
大英欽差大員應否在京長住抑或隨時往來仍照  
原約第三款明文總候本國  
諭旨遵行

第三款

一戊午原約後附專條作為廢紙所載賠償各  
項

大清大皇帝允以八百萬兩相易其應如何分繳即  
於十月十九日在天津郡先將銀伍拾萬兩繳  
楚以本年十月二十日即英國十二月初二日

以前應在粵者分繳三十三萬三千三百三十  
三兩內將查明該日以前粵省大吏經文填集  
沙面地方英商行基之費若干扣條入算其餘  
銀兩應於通商各關所納總數內分結扣繳二  
成以英月三個月為一結即行算清自本年英  
十月初一日即庚申年十一月二十日為第一  
結如此陸續扣繳八百萬總數完均當隨結清

交

大英欽差大臣專派委員監收外兩國彼此各應先  
期添派數員稽查數目清年等件以照慎重每

今所定取償八百萬兩內二百萬兩仍為往粵  
大英商補虧之款其六百萬兩少裨軍需之費載  
此明文庶免紛糾

第四款

一統增條約畫押之日

大清大皇帝允以天津郡城海口作為通商之埠凡  
有英民人等至此居住貿易均照經准各條所  
開各口章程比例畫一無別

第五款

一戊午年定約互換以後

大清大皇帝允於即日降諭各省督撫大吏以凡有  
華民情甘出口或在英國所屬各處或在外洋  
別地承工俱准與英民立約為憑無論單身或  
願攜帶家屬一併赴通商各口下英國船隻毫  
無禁阻該省大吏亦宜時與  
大英欽差大臣查照各口地方情形會定章程為保  
全前項華工之意

第六款

一前據本年二月二十八日

大清西廣總督勞崇光將粵東九龍司地方一區交



大典

大英駐紮粵省暫充法總局正使功賜三等寶星巴

夏禮代國立批承祖在案茲

大清大皇帝定即將該地及附典

大英大君主並歷後嗣并歸英屬香港政內以期該

港埠面管轄所及廣保無事其批作為廢紙外

共有該地華民自稱業戶應由彼此兩國各派

委員會勘查明果為該戶本業嗣後倘遇執必

令遷別地

大英國無不公當賠補

以上各條又續增條約現下

大清大英 各大臣同在京都禮部衙門蓋印垂押以昭信

守

大清咸豐十年九月 十一日

大英一千八百六十年十月 二十四日

大英君主  
暹羅君主  
英吉利與暹羅條約  
大英君主  
暹羅君主  
英吉利與暹羅條約  
大英君主  
暹羅君主  
英吉利與暹羅條約  
大英君主  
暹羅君主  
英吉利與暹羅條約

英吉利與暹羅條約

大英君主

暹羅君主

二王咸有意堅定兩國彼此友睦和好不絕且欲  
將彼此兩邦民庶貿易暨各工修藝業勸勵安撫  
俾得順適優逸而整飾指理以握兩國民人要鉅  
可以永保無虞同具此美意所以  
大英特派包玲公使大臣一員  
暹羅簡派王茅功穆臺翁沙提轅楠勒等五員為公  
堂大臣各將恭奉

上諭

救賜權衡便宜行事令旨互交驗閱均皆妥善協適  
茲將應行諸事欵詳開條列於左

一自今以後

大英君主及後代嗣王

暹羅君王

二王及後代嗣王永遠友睦和好凡有英民赴暹

羅國土必為國憲周全調護俾其寓居暹羅

境內無虞危峻一切貨運交易如意順適並不

致受暹羅民庶欺侮損害如遇暹羅民人前到

英境上或各屬地亦為國憲一律庇護

一凡有閑涉寓處暹羅之英民事務情節者皆歸

委派駐劄暹羅柵郭都領事官管理該領事官

宜將水約各條並前於丙戌年英國守備巴爾

尼所議建定條約內有未刪改各欵一切親履

遵行並率英民循蹈無越凡有月令或日後定

設約束寓居暹羅之英民及治理通商事欵暨

禁止不便暹羅法度之新章該領事官亦應一

體照行凡有暹羅英民相持爭論由該領事官

並暹羅該管官會同審斷罪在英民則領事官

以英例罰治罪在暹羅民則暹羅官以國例懲  
處惟有事專為暹羅所係者英領事官不得越  
俎予聞有事專為英民所關者暹羅官負亦無  
得出位干預且議定該領事官必俟兩國各將  
本約

御筆批准並必待

批約之後得有英資主懸掛英旗領取英字牌之貨  
船十隻進口以圖貿易方准其赴柵郭履任  
一凡有暹羅民人承英屬僱工使令而犯法者或  
有無論何項暹羅民人已犯法經或有意逃去

第七款

一戊午年所定原約除現定續約或有更張外  
其餘各節俟互換之後無不即日盡行毫無出  
入今定續約均應自畫押之日為始即行照辦  
兩國毋須別行

御筆批准惟當視與原約無異一疆道守  
第八款

一戊午年原約在京互換之日  
大清大皇帝允於即日降諭京外各省皆換大吏將  
此原約及續約各條發鈔給閱并令刊刻懸布

通衢咸使知悉

大清

一續增條約一經蓋印畫押戊午年和約亦已  
互換須候續約第八款內載

大清

大皇帝允降諭旨奉到業皆宣布所有英國弁  
山兵立當出境京外大軍即應啓程前赴津城  
並大沽砲臺登州北海廣東省城等處應俟統  
約第三款所載賠項八百萬兩總數交完方能  
回國抑或早退總候

大英大君主諭旨施行

致投往英屬家下躲避者由該領事官查明有  
犯罪或逃避之的據則將其人交與暹羅官憲  
治理凡有英屬民人或在暹羅寓居或偶到貨  
易因犯法而逃去在暹羅境內藏隱俟英領事  
官移咨請行拿交亦即照辦倘偶有華民前赴  
暹羅未携有確係英屬之批則英領事官不能  
援為英屬伊自不畋英領事官所託  
一凡有暹羅國各口皆准英人前往通商貿易至  
於恒常寓居惟准在棚郭都城並在條約內議  
定界限矣英民抵棚郭居住皆准其賃地買房

建屋惟自京城外以四十尋即英四里之程為度英氏已在暹羅居住十年以上方准其在畿內買地蓋房或由其人專請暹羅國憲特准者亦許之此外凡離棚郭城以內河舩艇一晝夜間行程之遠作為園地其中准購買房地園林樹木等產英人凡有欲置買者必先請英領事官移咨該管官憲英官與暹羅官會議酌奪定明英人並無反意勦佐協辦保得公定議價訂確四至地及蓋印契批交結收執永為該地業主其人其產皆為該郡及地方官所庇凡有

平常事節該管官憲以例令行該地主自應遵依課稅亦必同暹羅人一律輸納但該英人自領地以後三年為期如或懈於興工或力有未逮或緣別故致未與造暹羅國憲仍將該地段取回原價交還

一凡有英氏有意在暹羅居住必赴英領事官署將姓名登藉若欲出口或到本約定限居住之界外必先請英領事官轉咨暹羅官憲給照為憑或意欲離國而國憲移知英領事官指以有不便在其出境緣由暫不准他適惟上一條

載明其應得往來之界限向英領事官發給契  
票內用暹羅國字書明其人姓名業藝年負繕  
備移請暹羅官蓋印書押註記方聽其人其領  
任意前行遊玩暹羅國內諸處駐劄官員見有  
英人到境可向其索取照票驗閱刻勿停阻即  
放順道前往因無照票者致人慮其或係逃人  
自應將其留止刻為移行英領事官知照辦理  
一凡有英人在暹羅國居住或偶抵其地皆准往  
便拜禱

耶蘇至於禮拜堂字有欲建立者先行拆送地段呈

明暹羅該管官候查勘定奪即在英造凡暹羅  
民人一切充作英人司事服役百凡差使暹羅  
國憲俱不禁止如有暹羅人原有東主所管而  
其人投英屬下服其原主訪知其索回亦  
准其仍返原主其有英人僱倩暹羅人司事工  
作兩相約許而其人原管東主非經知情允准  
者迨欲取回由暹羅官憲審訊則前所約許作  
不足為據

一凡英師船駛入大江淮其到北澳閩地方旋泊  
除曰船隻損壞請為修理應駛行前進由暹羅

官憲自必專准者外概不能逾越前進駛泊如  
英師船係載駕

大美派到暹羅之

欽差大臣方任其直抵柵郭惟化拉加歲必伯訥二  
炮台前除暹羅官憲特進者餘不准往前駛過  
河面偶與英師船駐泊忽生更故英領事官欲  
將本屬商民抑或貨船水手約束亦可咨移暹  
羅官即應派遺兵彼協同勦助辦理  
一 凡前道光丙戌年間定有條約英船入口應納  
船鈔若干自今茲約與行後凡船鈔銀概行裁

免嗣後英船貨物貿易惟有起艙落載出口進  
口之課稅而已其入口貨物照價值按三分抽  
次如係貨物每百件內挾抽三件或按時價將  
貨值統挾估計每值百兩抽銀三兩如抽稅後  
其貨不能銷售仍載出口者暹羅管稅務監督  
官將原收稅項數交還貨主至進口時倘有  
貨物暹羅英商因閱吏議價不協應請英領  
事官移咨暹羅該管官會議彼此均勻邀集英  
商暹羅商公同估訂該貨價值其鴉片土進口  
概不納稅至出售時惟包攬經記頭人或經記



頭人之屬下人方准經手承買餘人不准交易  
購買倘英商英商占攬頭人等議價不協不肯  
出售或將鴉片土仍帶出口一切俱無鈔稅使  
費惟別行售買干犯本例者將鴉片土概行全  
抄入官  
其出口各貨自出產製造成時至登載上船出  
口惟納稅一次不論落地稅海關稅一物不重  
徵第二次稅銀凡暹羅土產各物無論由陸路  
下船及裝運出口其稅項皆在附後稅冊內登  
記明替又已會議詳妥各貨凡在內地已經納

稅者出口時不復重稅英商購買貨物准向該  
貨產造之原主直行議定交易暹羅人買貨亦  
准迤向英商訂買兩俱無庸旁人從中居間掙  
手本約附後稅冊銀數俱照中國安南國船載  
貨到暹羅之例凡中國安南船到暹羅嗣後有  
何獲受惠益之外英船亦一體同得英商需裝  
造新船應請暹羅該管官准行方得與工裝造  
鹽米魚三種如內地所產恐或不敷應由暹羅  
官憲出示禁止不准運載出口凡金銀製造器  
皿出入口者概不徵稅

一凡有後開通商章程該領事官與暹羅官憲認真率令遵行如查各章程尚有未及未同英與暹羅兩國官員會同商議酌為加增條款俾倍委遵約凡有犯本約條例所罰銀兩俱歸暹羅國收理英領事官未到柵郭履任之先凡有各貨船管商准其赴暹羅官憲署面請會議諸務以期詳協

一凡嗣後暹羅國別有允許他國人民及許他國惠益之外亦准英人同得有加增推廣者亦准英人增廣

一自將本約呈請兩國

君主御筆批押定奪以後十年為期滿時有英國或暹羅國需為重加訂改者先一年預為聲明俾兩國各

簡派大臣會同商議批其識畧意見將本條約並丙戌年定約內有未改訂之條及稅冊章程又或有後未增入改訂者即為酌奪妥辦

一凡本約各款應繕寫英文暹羅文各一帙文理意義皆同兩國

御筆批押彼此先為分交收執於  
耶蘇降生一千八百五十六年四月初六日即暹羅

一千二百一十八年五月初一日是日為始自  
後即照約施行所有前出名之兩國

欽差大臣已將本約條例於降生一千八百五十五

年四月十八日即暹羅一千二百一十七年六

月初二日繕備四紙各加書押簽記以為握批

通商章程

一凡有英貨船到棚郭貿易該船駛至淺脚寄旋

或前或後著使人前赴北境關上報進口單開

本船水手若干名炮若干位及由何地駛行到

此呈載詳替並將船內所有砲位鉄彈火藥呈

交關吏收貯由關派委員一名到船一同前進

駛入棚郭都城

一凡有英貨船不遵上列條例行抵滬竟未呈交

砲位彈藥送行駛進當即令其返抵地滬照例

舉行仍罰銀八百鉢再令其將砲位彈藥一概

交出然後開行進詣棚郭都城

一凡英船抵棚郭灣泊除禮拜日不許外著該船

主限二十四點鐘內赴英領事官署將船牌貨

單呈交明替聽候移咨海關監督刻為發牌開

船然後起貨倘有隱報虛報等弊違犯本例者

罰銀四百銖如設船呈報後限二十四點鐘之久許其自查有漏報錯誤之處即准再赴領事官署檢奉呈明請改

一凡有英船進口以後尚未請報管酌奪遵行而擅自開槍者或走私漏報脫漏課稅者均罰銀八百銖仍將私漏之貨物盡數查抄入官

一凡有美船入口之後將貨物全行起卸至回帆時將出口貨物裝載完畢交納稅餉清訖將紅單赴領事官署呈明領事官查奪移知管關官復核其並無不准出口事故由關給與獎單另

派委屬官一員同赴北境將前交貯之砲位彈藥仍行付還准其揚輿出口

一凡遇

大英欽差大臣有不諳暹羅言語文字者茲兩國議定條約稅則章程以英文為準文理意義實解皆在英文內閱之可得其確據

計開出口貨物凡在國內各落地稅關稅俱不征納惟有出口各稅款開列於左

象牙每担餉銀一朱  
鼈甲每担餉銀一朱  
牛皮每担餉銀一朱  
藤黃每担餉銀六朱

浮大海每担餉銀二錢	山甲每担餉銀四末	箭翎每担餉銀二末二錢	兒茶 <small>即</small> 楓每担餉銀二錢	象皮每担餉銀一末	沙仁每担餉銀六末	毛燕每百斤抽二十斤	虎骨每担餉銀五末	犀角每担餉銀五十末	海參每担餉銀三末
紫梗每担餉銀一末一錢	玉只每担餉銀一末	馬錢每担餉銀二錢	虎皮每担餉銀一末	永鸞于每担餉銀一末	烏皮每百張餉銀六末	牛角每担餉銀一末	白豆蔻每担餉銀十四末	魚肚每担餉銀三末	象骨每担餉銀一末

降真每担餉銀二錢	亭仔每担餉銀一末二錢	白樹皮每担餉銀二錢	烏魚翅每担餉銀三末	三班于每担餉銀一末	魴魚皮每担餉銀三末	孔雀屎每百斤餉銀十末	鹿肉每担餉銀二錢	牛骨每担餉銀三分七毫五	犀皮每担餉銀二錢
甘文煙每担餉銀四末	白臭翅每担餉銀六末	庚魚于每担餉銀一末二錢	香柴每担餉銀二末	甘密每担餉銀二錢	蘇水每担餉銀二末一錢	色角每担餉銀一錢	鹿茸價銀百末餉銀十末	拷皮每担餉銀一錢	鹿仔皮每百張餉銀八末

紅柴每担餉銀二錢  
 西仔皮每百張餉銀三兩  
 龜底每担餉銀一兩  
 米每車餉銀四兩  
 二議明後開各貨物照本約條例納餉其在內地亦照例征收至裝載出口時無庸重納稅餉  
 白糖每担餉銀二錢  
 蜂蠟每十五份抽餉一份  
 蝦米每十二分抽餉一分  
 棉花每十担抽餉一担  
 真皮每担餉銀一錢  
 鳥木每担餉銀一兩一錢  
 鹿筋每担餉銀四兩  
 各色豆每十二份抽餉一份  
 赤糖每担餉銀一錢  
 牛油每担餉銀一兩  
 油麻每十二分抽餉一分

鹽每車餉銀六兩  
 莞仔絲每十二分抽餉一分  
 甘望魚脯每萬餉銀一兩  
 胡椒每担餉銀一兩  
 萱芬即生烟每千束抽餉銀一兩  
 三議定凡各貨物有未經此冊登藉註記者所有應納內地稅餉俱照現行例征納不得加增已納此稅者方准其出口無庸重征稅餉



